

蔵王堂城址発掘調査報告書

1981

長岡市教育委員会

序

この調査報告書は昭和53年10月と昭和54年9月から10月にかけて発掘調査を実施した、本市指定文化財蔵王堂城址の発掘調査の記録です。

蔵王堂城は南北朝時代にはこの地方の中心として、宮方と足利方の争奪の拠点であった。くだって慶長年間には堀親良や直奇の居城となり、元和4(1618)年に長岡城が築城されたため廃城となりました。

今回の調査は堀氏とゆかりの深い根津美術館顧問の奥田直栄氏に依頼し、濠の一部と城郭の一部の発掘調査をし、城址の基礎的資料を得ました。それによって、この城址の環境整備を行い、遺跡の保存と活用をはかろうとするものです。

幸い、奥田氏をはじめ、調査執筆を分担された馬淵和雄氏、大橋康二氏、写真を担当された東京国立博物館の小松大秀氏、新潟県教育委員会等、直接、間接に御協力いただき、所期の目的を達成することができました。あわせて長岡の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

ここに関係者に対し心からお礼申し上げます。

昭和56年4月

長岡市教育委員会

教育長 横田 博

目 次

I 昭和53年度調査（第1次調査）	1
第1トレンチ	1
第2トレンチ	3
出土遺物	4
結 言	7
II 昭和54年度調査（第2次調査）	8
第3トレンチ	8
第4トレンチ	10
第5トレンチ	10
第6トレンチ	11
第7トレンチ	12
出土遺物	12
結 言	19

図 版 目 次

<p>図版1 第1トレンチを東側より望む</p> <p>図版2 第1トレンチ濠底の段</p> <p>図版3 第1トレンチ濠底の段</p> <p>図版4 第2トレンチを東側より望む</p> <p>図版5①第2トレンチ濠内土層断面</p> <p style="padding-left: 2em;">②第2トレンチ濠東岸の土層断面</p> <p>図版6 第2トレンチ濠内東部分の土層</p> <p>図版7①第3トレンチ</p> <p style="padding-left: 2em;">②第4トレンチの濠</p> <p>図版8①第5トレンチ</p> <p style="padding-left: 2em;">②第6トレンチ</p>	<p>図版9上第6トレンチ美濃皿出土状態 下第7トレンチ</p> <p>図版10 染付・青磁・白磁</p> <p>図版11 青磁</p> <p>図版12 瀬戸・美濃</p> <p>図版13 越前</p> <p>図版14 越前・珠洲系</p> <p>図版15 珠洲系</p> <p>図版16 珠洲系</p> <p>図版17 須恵貫陶器</p> <p>図版18 藏王社御境内之図</p>
---	---

挿 図 目 次

第1図 藏王堂城址調査区全区	折込み	1・2
第2図 第1・第2トレンチ土層断面	折込み	3・4
第3図 珠洲系甕		6
第4図 珠洲系陶片・唐津系皿・白磁皿・古銭		6
第5図 第3・第4・第5トレンチ土層断面	折込み	9・10
第6図 第6・第7トレンチ土層断面	折込み	11・12
第7図 船載陶磁器、瀬戸・美濃・越前陶片		14
第8図 珠洲系陶片		16
第9図 須恵貫陶片		18

蔵王堂城址発掘調査記録

I. 昭和53年度調査（第1次調査）

信濃川の東岸に位置する蔵王堂城址は宅地化が進み、主郭の一部の塁濠の跡を残すのみである。この塁濠の遺残する部分は主郭の南・東・北にかけてであり、南側は東半の土塁と濠が往時の面影をとどめている。東側の塁濠は土塁の一部が宅地によって消滅したが、北半はかなりの高さ残り、北側への土塁へと続く。北側の濠は殆んど埋没して、現地表にその痕跡を認めることはできない。北側の土塁は西端に到ると南折してわずかの部分がやせ細りながらも遺存している。

古図や現地形の観察からこの主郭の北・東・南側にいくつかの郭が配されていたことは容易に想像できる。恐らく、自然の要害の信濃川を背にして、この三方の守りを固めたものであろう。

今回の調査は保存のよい主郭東側の濠に主眼をおいて、濠の構造や主郭の入口部の構造を明らかにすべく、二箇所にてトレンチを設定した。現在の橋のすぐ南の地点に設けたものを第1トレンチとし、更に21m南方の東南コーナー近くに設けたものを第2トレンチとした。

（第1図）

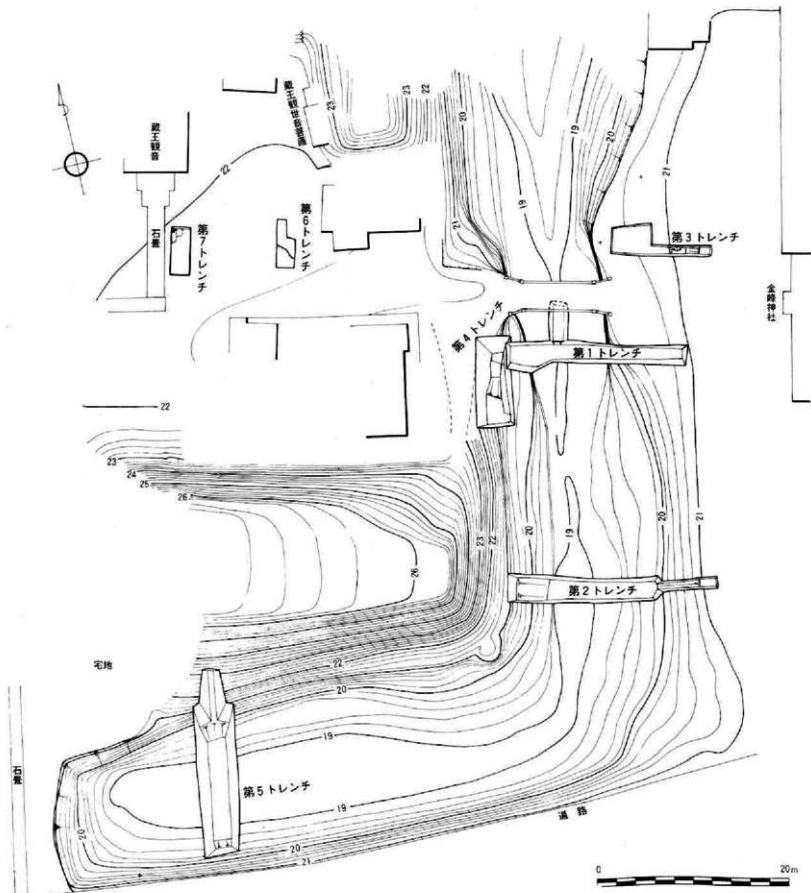
第1トレンチ

現地表で見ると橋の東側基部は幾分濠へと張り出しており、元来橋台が設けられていた可能性が想定できたため、この張り出し部にかかるようにトレンチを設定した。

発掘の結果、第2図①の如き土層断面が観察された。現在の濠の岸には河原石を積み上げた石垣が見られるが、この石垣の基底は表面より80cmぐらい下方であり、土質がヘドロ状のため、丸太材を下に敷いている。図中の②の線はこの石垣構築時の濠底及び濠壁の掘方であり、石垣との間には礫を多く含む土を充填している。なお、この石垣の構築年代は大正時代と言われている。

東岸ではこの石垣の裏は更に5m以上東方まで埋立の土が詰まっている。この土は礫混りの土であり、近代の瓦片なども含まれている。濠の底においては、厚さ50cmぐらいの暗青緑色粘質土、その下に同じくぐらいの厚さで青緑色砂質土が最終築城時の濠底の上に堆積している。濠底は地山の砂礫層であり、この標高は17.47mである。

この土層断面図（第2図①）の西半では南側の濠底から北へと急に高くなるように作られ



第1図 藤王堂城址調査区全図

た濠底の段の壁の一部がかかっている。この濠底の段の壁は赤褐色砂質土であり、この段の
高さは50cm～60cmである。

濠の壁は東側では確認できたが、西側では検出できなかった。これはこの部分の濠が西方
へ屈折していたらしいという古図から得られた知見を裏付けるものかもしれない。

東側濠壁は勾配約24度と緩傾斜であり、上方の濠落ち口は樹木の制約などから調査し得な
かった。なお、前述のような濠底の段は、他の類例からは橋部分においてしばしば見られる
施設であり、北側に橋が設けられていた可能性を示している。東側濠壁の勾配が緩いことも
東側の橋台の存在と関わりがあるのかもしれない。

第2トレンチ

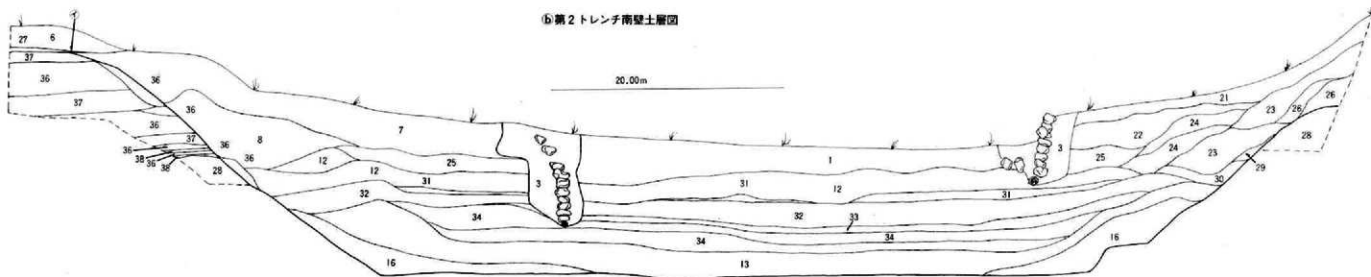
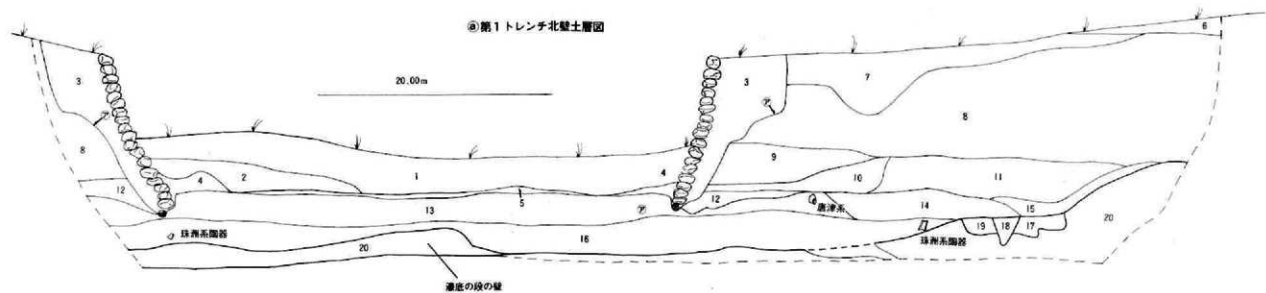
第1トレンチの南21mの地点で主郭南東隅にかかるように設定した。やはり大正時代の石垣の基底部の下に粘質土の堆積が見られ、現地表より2m~2.6m程で最終築城時の濠底に達する。濠底は砂礫層である(第2図 ⑤)。

濠底巾は11.3m、濠底標高は17mである。西側濠壁は図のように地山を加工して、巾20cm~60cmの段を作っている。この濠壁の勾配はおよそ47度である。濠壁の上には土塁の積土の崩落土の堆積が看取できる。

東側の濠壁も約50度の勾配で作られているが、上半は岩盤を加工した上に丁寧に粘質土、砂質土を積み重ねて濠壁を築成している。落ち口は後世の上砂の流出を考慮せねばならないが、図の④の地点付近と推定される。濠の深さをこの④の地点から測ると3.5mである。

第1・第2トレンチ土層説明

- | | |
|-------------|--------------|
| 1. 黒褐色腐蝕土 | 20. 赤褐色砂質土 |
| 2. 暗灰青色砂質土 | 21. 表土 |
| 3. 大正時代の石垣 | 22. 灰褐色土 |
| 4. 3の流出土 | 23. 暗褐色土 |
| 5. 黒色腐蝕土 | 24. 黄褐色粘質土 |
| 6. 現代の歩道 | 25. 灰緑色粘質土 |
| 7. 黄白色土 | 26. 淡褐色砂質土 |
| 8. 灰黄色土 | 27. 歩道構築時の砂層 |
| 9. 灰黄緑色土 | 28. 黄白色砂質土 |
| 10. 黒褐色腐蝕土 | 29. 黒褐色土 |
| 11. 灰褐色砂質土 | 30. 黄白色粘質土 |
| 12. 暗黄緑色粘質土 | 31. 黒色腐蝕土 |
| 13. 暗青緑色粘質土 | 32. 黄緑色粘質土 |
| 14. 灰緑色粘質土 | 33. 黒色腐蝕土 |
| 15. 礫層 | 34. 暗青緑色粘質土 |
| 16. 青緑色砂質土 | 36. 淡黄褐色砂質土 |
| 17. 暗青緑色砂質土 | 37. 灰黄白色砂質土 |
| 18. 青緑色砂質土 | 38. 明黄褐色砂質土 |
| 19. 褐色砂質土 | |



第2図 第1・第2トレンチ土層断面図 (1/60)

今回の調査は、以上のように主郭をめぐる濠の一部を発掘調査したにすぎないが、この調査から知り得たことをまとめると、濠は巾19.30m、深さ3.5m、濠底巾11.3mであり、濠壁の勾配47～50度くらいの濠底巾の広い、いわゆる箱築研堀と言えよう。

第2トレンチにおける濠西壁では二つの段が濠壁に設けられていた。こうした段は他の中近世の城郭の濠壁にも類例がある。多くの場合、内方の濠壁に設けられ、しかも部分的な場合が多いようであるが、本城址の場合にはいかなるあり方をなすのか今後の調査の課題として残される。

濠底は砂礫の地山層を掘穿して造成されている。濠底のレベルは第2トレンチの部分より第1トレンチの濠底の方が約47cm高くなっており、更に、北に50cm～60cmくらいの比高をもつ段が設けられて濠底は高くなっている。このレベルの高くなる段が橋台間の施設か否かは、もう少し調査する必要がある。

また、第1トレンチにおいて、濠の西壁が検出できず、濠が西へ延びる可能性を生じたことは、古図の傍証もあることから、濠が人口部において複雑に設計されていたことを想像できる。この点についても今後の調査において確実な証左を得る必要がある。(大橋康二)

出土遺物

今回の調査で得た近世以前の遺物は、第1トレンチからのものを中心に、わずかに7点の出土をみに留まった。このうち、陶磁器が6点を数える。他の1点は銭貨である。

(白磁 (第4図6))

小皿形の破片が第1トレンチ青緑色粘質土層から出土した。半ば失透した淡黄白色を呈する釉薬が見込から高台脇まで安定した調子で施されている。見込の釉薬中には細かな貫入が多い。見込中央部には削り残しの突起が見られ、その頂点は径4mm程使用により欠損し、露胎している。胎土は淡黄白色の精土であり、気泡はやや多いが砂粒は少ない。見込の部分の劈開面に1.5mm程の、融けきっていない長石らしい粒子が1点認められる。焼成はやや不良であると言える。高台は左回転口による削り出し。高台脇に削り出しの際のしわが見られる。畳付は使用により擦ったかのように滑らかである。

(珠洲系陶器 (第3図1, 第4図2～4))

甕の残欠3点(1～3)と播鉢の残欠1点(4)が得られた。甕はいずれも別個体と思われる。

1は第1トレンチ青緑色砂質土層からの出土。復元推定口径43cmを超える大甕の口縁であ

る。灰黒色の胎土には1mm未満の気泡が多く、砂粒や小礫を散見するが、岩石質で極めて堅緻に焼き締められている。外面の叩き痕は、頸部の凹帯を越えて口縁下側にも数箇所残っている。口縁には丁寧な横なでが認められ、端部に丸味のある面取りが施されているが、断面はほぼ角形を呈する。内面の、頸部のくびれにより下には、成形時の擦痕が多い。口縁と、外面の(当残欠の)下半部に、白い斑点状の降灰現像が認められる。

2も大甕の破片であるが、1よりも頸部の肥厚度が著しい。内面上部は横なでによる整形である。胎土は1よりも白っぽく、焼成も1ほどには良くない。これも第1トレンチ青緑色砂質土層から得られた。

3は大甕の胴下半、叩き締めの施されなくなる底部に近い部分であろうと思われる。胎土は灰白色、焼成は良好である。内底には降灰が顕著。第1トレンチ西方の赤褐色砂質土直上(濠底)、青緑色砂質土から出土した。

第2トレンチより層位不明であるが、播鉢片が出土した(4)。わずかに黄色がかった灰白色を呈する。焼成は若干甘い。内面に条線帯が刻まれているが、条線帯は1束11本であり、刻み原体の巾は2cm、櫛歯の間隔は2mmである。

〈唐津系陶器 (第4図5)〉

肥前古窯産と思われる陶器皿が第1トレンチ青緑色粘質土層より出土した。暗黄緑色の土灰釉が高台脇から内面全面に施されている。土灰釉は本来透明釉であるが、わずかに灰分らしい不純物や気泡のため、見込部でやや白濁する。釉調はかなり不安定であり、それは外壁にとりわけ著しい。胎土には細かい気泡や砂粒がわずかに含まれるが、灰白色の精土であり、焼成も極めて良好である。器表の露台部は、若干酸化して灰褐色を呈する。高台は右回転ロクロによる糸切りの後、浅くかんなが当てられて左回転ロクロにより低く削り出される。糸切り痕を償付と高台脇の一部に留める。高台内の削りはかんなが当ててロクロを一回転させただけの粗雑なもの。器壁は内側に緩やかにカーブしながら立ち上がり、口縁を外に折って上部に凹帯を作っている。見込と高台の一部に目砂が付着。

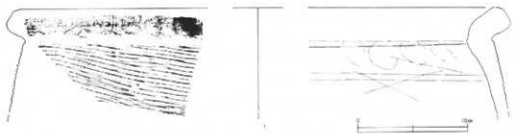
〈寛永通宝 (第4図7)〉

第1トレンチ青緑色粘質土層からの出土。背文はなし。鑄造年は1636～1656年。

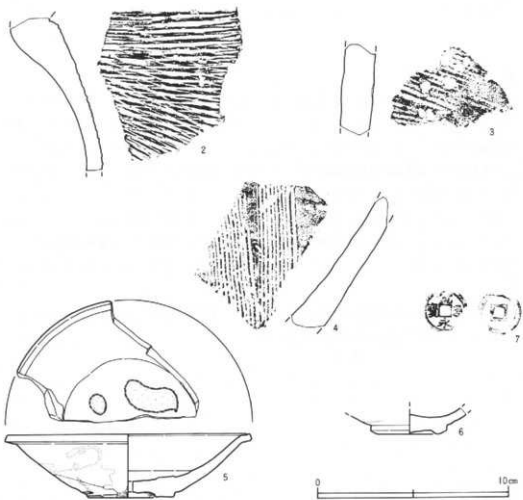
(馬淵和雄)

以上のように濠底近くからの出土品は白磁小皿、珠洲系陶片、唐津系陶片など少量の遺物が得られたに過ぎない。特に珠洲系播鉢片1点を除いて、全て第1トレンチから出土したことは入口、すなわち橋台がこの地点附近に存したことを示唆するものではなからうか。

濠底に堆積した青緑色砂質土、青緑色粘質土中からの出土品のうち、寛永通宝以外の遺物



第3圖 珠洲系甕



第4圖 珠洲系陶片・唐津系皿・白磁皿・古錢

が比較的早く、特に珠洲系陶片のように未だ16世紀の生産・消費を示す確実な資料が発見されていない製品がここに出土したことは何を物語るのであろうか。確かに16世紀の城館址から越前焼と共に少量出土する例があり、珠洲系陶器の終末については、なお検討の余地がある。

6の船載品白磁小皿と同類のものは最近増加した資料を見ると、北海道から沖縄までの15世紀から16世紀末までの遺跡から出土しており、長い期間にわたって輸入されたいが、この間に、形制の上でわずかな変化が認められる。本品は比較的後出の特徴を見せる。

唐津系陶器が新潟県内で出土した例は、上越市福島城址が知られるが、5の唐津系皿がいつごろの所産であるかは断じ難い。しかし、口縁や高台の作りは、生産地における出土例を見ると江戸中期以前のもと思われる。いずれにせよ、国内流通を考える上で重要な文物と言えよう。

結 言

今次の発掘で当城内郭墨濠の最後の姿に関する知見が得られたことは、一つの収穫であった。しかし、将来の復原に資するためには、全面的発掘が望ましいが、そうでなくても、最低限南側墨濠にかけ、何本かのトレンチを掘ることは絶対に必要であろう。また第1トレンチを拡大して土橋部の遺構を追究することも是非、実行すべきであろう。そうでないと今回の少部分の発掘目的さえも半分しか達せられないことになってしまう。

何片か発見された珠洲焼は、今日常識的には室町なかば頃までに終末をむかえたものと言われている。もちろん相当な耐用期間もあろうし、実際には生産年代が下降する場合もないとは言えない。しかし、一方において当遺跡が中世に遡ることを示しているものとも考えられる。

いずれの地点において層位学的事実があるかないかを捜査することが、正しい復原をするためにもこれまた不可欠の条件ではあるまいか。

(奥田直栄)

II. 昭和54年度調査（第2次調査）

信濃川の東岸に存する藏王堂城址は現在安禪寺境内となっている本丸跡を残すのみである。しかし、古絵図や現地の町並の状態をみると、往時は本丸を中心に東へと曲輪が同心円状に拡がっていたものと推察できる。勿論、本丸の西側は信濃川という自然の要害に守られているため、その反対側に人工の防護施設が縄張りされたものであろう。

本丸跡は土塁も含めると、一辺70m程のほぼ平面方形を呈する。現在、本丸跡の西側半分はほとんど住宅地によって消失しており、わずかに東半部の塁濠を残すのみである。

発掘調査はこの濠の本米の状態を知るべく、昭和53年に第1トレンチ、第2トレンチ、昭和54年には第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチを設けて濠と橋部分の調査を行った（第1図）。

また、この城郭の年代や往時の生活の様子を考える上で、本丸内部の調査も必要とされたため、郭内に2つのトレンチを設け、それぞれ第6トレンチ、第7トレンチの名称を付した。本報告は昭和54年度調査部分について、以下順次述べることとする。

第3トレンチ

本丸東側の濠に現在も橋がかかっており、安禪寺境内へ入る一つの通路となっているが、古絵図などによれば、元来本丸内へ通ずる主たる橋がかけられていたことが知られる。そして、すでに第1トレンチの調査によって濠底が一段高くなっており、橋台の存在が推定されたが、この橋台の原状を明らかにするために橋の東端北側にトレンチを設けた。この設定に際しては現在の橋や樹木などの制約を受けた。

調査の結果、現地表より深さ1m～1.2mほどで黄色粘質土層（第5図の19）があり、これが地山の土かと思われる。この土層上面は平坦ではなく、図のように西部が高く中央部分が一段低く削平されているようである。この一段低い面の上にはカーボンを多く含む土が堆積している（第5図の8）。そして、この面の東側には小濠かと思しき落込みがみられ、珠洲系陶片1点と須恵質陶片1点が出土している。珠洲系壺片は前述の一段低い平坦面上から1点出土したが、セクション図に見られるように上方から掘り込まれたピットの底部に位置するとも言える。

以上の黄色粘質土層が人工を加えられたものであることは明らかとなったが、この黄色粘質土層の上には図のように水平にいくつかの土層が重なっている。図の5のように、上面が平らかに形成された、カーボンを多く含む暗黄褐色粘質土層もあるが、城郭の最終期の面がどれであるかは明確にしえなかった。

第3トレンチ土層説明

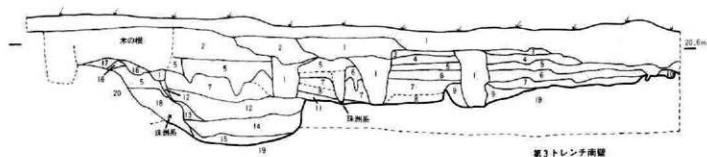
- | | |
|---------------------------|--|
| 1. 暗黄褐色土 (表土) | 13. 明灰褐色砂質土 |
| 2. 黄褐色粘質土 | 14. 黄色砂礫土 |
| 3. 黄色砂礫土 | 15. 黄白色砂質土 (若干の粘土・礫を含む) |
| 4. 褐色土 (若干カーボン含む) | 16. 茶褐色粘質土 |
| 5. 暗黄褐色粘質土 (硬くしまり、カーボン多い) | 17. 暗茶褐色粘質土 |
| 6. 灰色粘質土 (若干カーボン含む) | 18. 淡灰褐色粘質土 (硬くしまり、若干のカーボンを含む) |
| 7. 明灰褐色粘質土 (若干カーボン含む) | 19. 黄色粘質土 (上部には若干カーボンが見られるが、おおむね均質で硬くしまっている) |
| 8. 明灰褐色粘質土 (カーボン多い) | 20. 淡灰褐色粘質土 (18に似た土。若干カーボン含む) |
| 9. 灰黄色粘質土 (若干カーボン含む) | |
| 10. 淡黄褐色粘質土 | |
| 11. 暗褐色粘質土 (カーボン多い) | |
| 12. 黄褐色粘質土 (若干カーボン・礫を含む) | |

第4トレンチ土層説明

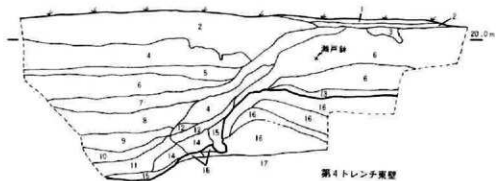
- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 黄褐色粘質土 (最近の盛土) | 10. 黒褐色粘質土 (上面は植物質堆積) |
| 2. 暗褐色土 (表土) | 11. 青灰色粘質土 (上面は植物質堆積) |
| 3. 暗黄褐色粘質土 | 12. 明褐色粘質土 |
| 4. 褐色粘質土 | 13. 灰色砂質土 |
| 5. 暗褐色粘質土 | 14. 灰青色粘質土 |
| 6. 黄褐色粘質土 | 15. 灰青色砂質土 |
| 7. 暗褐色土 (礫混入) | 16. 灰褐色砂質土 |
| 8. 灰褐色粘質土 (礫混入) | 17. 赤褐色砂質土 (鉄分多い) |
| 9. 濃青灰色粘質土 (大きな円礫混入) | |

第5トレンチ土層説明

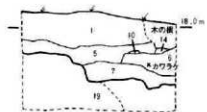
- | | |
|--------------------------|-------------------------------|
| 1. 暗灰緑色粘土 | 17. 黄灰色砂礫層 |
| 2. 暗褐色粘質土 (礫や木の枝など多い) | 18. 淡黄褐色粘質土 |
| 3. 暗褐色土 | 19. 灰褐色粘質土 |
| 4. 褐色粘質土 | 20. 灰青色粘土 |
| 5. 灰青色粘質土 | 21. 灰青色粘土 (礫を含み、混土多い) |
| 6. 茶褐色粘質土 | 22. 淡灰青色粘土 |
| 7. 灰褐色粘質土 (礫含み、硬くしまっている) | 23. 灰褐色粘土 |
| 8. 青灰色粘土 | 24. 暗灰青色粘土 (礫や植物質を含む) |
| 9. 黒褐色粘土 | 25. 灰色砂礫層 |
| 10. 暗灰色粘土 | 26. 黄褐色粘質土 (若干礫を含む) |
| 11. 淡灰緑色粘土 (上面は植物質堆積) | 27. 黒褐色土 |
| 12. 灰青色粘土 (上面は植物質堆積) | 28. 暗褐色粘質土 |
| 13. 灰青色砂層 (上面は植物質堆積) | 29. 淡灰青色粘質土 |
| 14. 青灰色砂層 | 30. 灰褐色砂質土 (上面は鉄分のためか、赤褐色を呈す) |
| 15. 青灰色砂礫層 | 31. 黄褐色粘質土 (硬くしまっている) |
| 16. 橙褐色砂礫層 | |



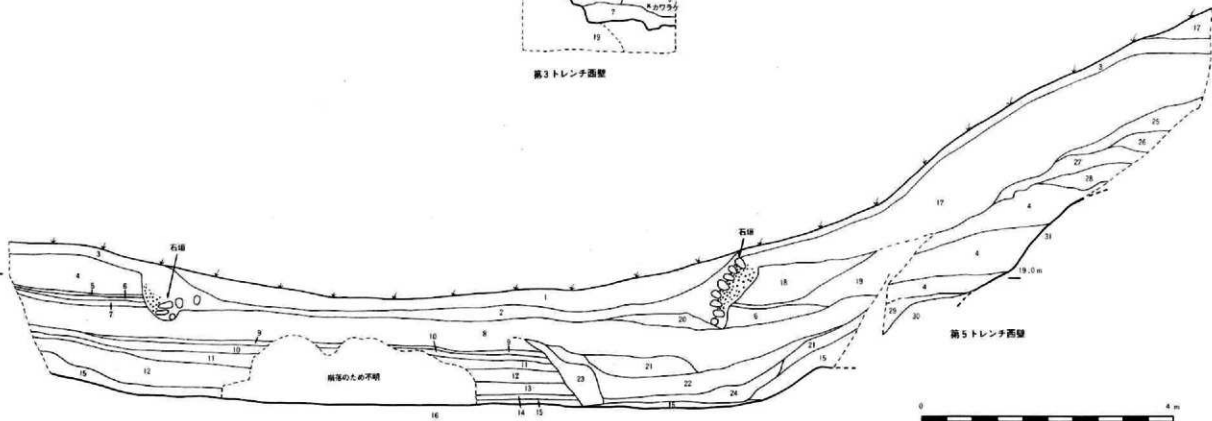
第3トレンチ南壁



第4トレンチ東壁



第3トレンチ北壁



第5トレンチ西壁

第5図 第3・第4・第5トレンチ土層断面図

しかし第1トレンチで確認した深い濠が第3トレンチにおいて見られないことは、現地表面の観察でも知りうるように、橋部分の濠東岸が張り出していたことを物語るものであるが、この張り出しは先に述べたように必ずしも単純な形状のものではなさそうである。また、いくつかの土層が重ねられていることや、下層から城郭最終期より古いと思われる須恵質陶片が出土していることに加えて、後述の本丸内の調査から判るように城郭の修築策が度々なされたようであり、それが第3トレンチのセクションの複雑さの主因かと思われるのである。いずれにせよ、この区域はもう少し広く調査しなければ、橋台の原状を把握し難いのである。

第4トレンチ

第4トレンチは第1トレンチの調査時に濠の西岸が検出できなかったことや、古絵図に西方へと少し伸びる濠の分岐が見られ、門の部分の防禦を堅固にしているかに看取されたことから、その濠の存在を確認するために設けたトレンチである。

発掘の結果、東西方向の濠の南岸が発見された。現在の橋があるために北岸の橋台側は調査しえなかったが、西走する濠の存在は間違いない。第5図のように、灰褐色ないし、赤褐色の砂質土を掘り込んでおり、濠南岸の上には灰色砂質土、黄褐色粘質土を積んでいる。この黄褐色粘質土中から瀬戸の灰釉鉢の細片が出土しているが、これは細片のため即断は避けねばならないが、室町期頃のものとして略間違いない。濠の深さは地山面で測ると、1.45m、黄褐色粘質土面では約2.5mとなる。濠底の標高は17.75mである。第1トレンチ濠底は標高17.47mであるから28cm高い。

なお、濠壁下部には幾分斜めに掘られたピットが見られる。これは砂質の地山の崩落を防ぐ土止め用の杭の跡かとも想像される。濠下部には灰青色粘質土が堆積し、第1トレンチ、第2トレンチの濠下部同様に植物質の堆積のある黒褐色粘質土が底面より40cm程上方に堆積している。濠壁面下方より須恵質陶片（第9図3）が出土している。

第5トレンチ

第5トレンチは本丸南側の濠の原状を知るために設定したものである。第2トレンチの濠底同様に濠底は橙褐色砂礫層であり、北側の濠壁は黄褐色粘質土面であった。第5図のように濠底の上には青灰色砂礫層、青灰色砂層が水平堆積をみせ、その上方に植物質の堆積のみられる粘土層が重なっている。

濠の南と北側に見られる石垣は、大正頃に築かれたものと言われるから、その頃までに濠底より1.2m程の土壤堆積があったことになる。ただし、濠底北部は水平に重なった土層に乱れが見られるため、後世の攪乱があったものと思われる。濠底巾は約10.5m、濠底の標高は約16.95mである。ちなみに第2トレンチの濠底の標高は17.0mであるから、この二点間

に傾斜はほとんど認められない。

濠北側は、図のように最近の盛土が厚い。宅造などの際に余った土砂を土塁に盛ったというから、この土塁は城郭時代より規模を大きくしている可能性が高い。

第6トレンチ

本丸内の東門寄りに設定したトレンチである。第6図のセクション図にみられるように、上層は礫を含む粘質土層やカーボンを含む粘質土層などが堆積している。図中⑥より上の土層は、近世以降の堆積層と考えられる。一方、径5cm位の円礫を多く含んだ黄褐色砂質土層（図中⑤）からは明代の青磁（第7図2）やかわらけ片が出土している。円礫は雑然と投入されたらしく、地業層とみられる。図中⑦の厚い黄色砂質土層も地業層であろう。図中⑧の薄い黄白色砂質土層上面は鉄分のためか赤褐色を呈す。この層の上面、及び⑩の灰白色粘質土層上面は生活面である。部分的にみられる⑩の黄白色粘質土層も硬くしまり、下方の⑩から上方の⑩に至る過程の、溝周縁に施した部分的地業とみることができよう。溝は巾約1.2

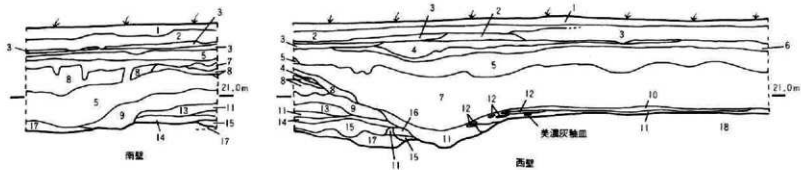
第6トレンチ土層説明

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰褐色粘質土（表土） | 10. 黄白色砂質土 |
| 2. 暗黄褐色粘質土 | 11. 青灰色粘質土（カーボン含む） |
| 3. 暗黄灰色粘質土 | 12. 黄白色粘質土（地業面） |
| 4. 黄褐色砂質土 | 13. 灰褐色粘質土 |
| 5. 黄褐色砂質土（円礫多い） | 14. 明青灰色粘質土 |
| 6. 暗褐色粘質土（カーボン多い） | 15. 暗青灰色粘質土（若干カーボン含む） |
| 7. 黄色砂質土 | 16. 暗灰色粘質土（若干カーボン含む） |
| 8. 暗黄褐色土 | 17. 青灰色粘質土（カーボン多い） |
| 9. 暗灰褐色粘質土 | 18. 灰白色粘質土（硬くしまっている） |

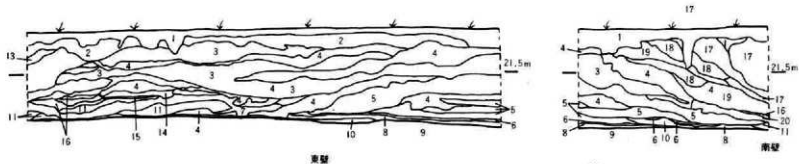
第7トレンチ土層説明

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 暗黄褐色砂質土（表土） | 18. 明黄色砂質土（17と黄色粘質土の混土） |
| 2. 黄褐色砂質土 | 19. 褐色粘質土（若干カーボン含む） |
| 3. 明黄褐色砂質土 | 20. 暗灰色粘質土（硬くしまり、上面は橙褐色を呈し、一時期の生活面か） |
| 4. 暗褐色土（カーボン多い） | 21. 黄褐色粘質土 |
| 5. 黄白色砂質土 | 22. 黄色粘質土（硬くしまっている） |
| 6. 赤褐色砂質土（硬くしまり、一時期の生活面か） | 23. 黒褐色粘質土（カーボン含む） |
| 7. 灰白色粘質土 | 24. 黒灰色粘質土（カーボン含む、硬くしまっている） |
| 8. 灰白色砂質土 | 25. 暗褐色粘質土（カーボン含む、硬くしまっている） |
| 9. 灰白色粘質土（地業面） | 26. 暗茶褐色粘質土（カーボン・鉄分多い） |
| 10. 黒褐色粘質土（カーボン含む） | 27. 暗灰色粘質土（カーボン・鉄分多い） |
| 11. 灰褐色粘質土（若干カーボン含む） | 28. 茶色粘質土（カーボン・鉄分多い） |
| 12. 黄褐色土（若干カーボン含む） | 29. 黒灰色粘質土（カーボン・鉄分多い） |
| 13. 明黄褐色粘質土 | 30. 暗灰色粘質土（カーボン含む） |
| 14. 茶褐色粘質土 | 31. 灰褐色粘質土（若干礫を含む） |
| 15. 赤褐色焼土層（上面にカーボンが堆積。ガリガリの状態） | 32. 暗灰褐色粘質土（若干礫を含む） |
| 16. 灰褐色粘質土（上面の一部は15） | |
| 17. 明黄色砂質土 | |

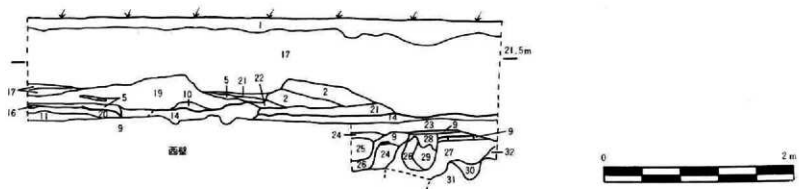
混土層



第6トレンチ



第7トレンチ



第6図 第6・第7トレンチ土層断面図

m、深さ約30cmの小溝である。溝の南側には顕著な生活面はみられず、粘質土、砂質土、若干の円礫などを少し盛り上げた遺構が存するようである。

⑧の生活面上において黒褐色陶片、珠洲系陶片などが出土し、この上に堆積したカーボンを含む青灰色粘質土層中から美濃系灰釉皿（第7図7）が出土している。これらの遺物の年代は多少の巾をとっても室町後期におさまりそうである。

第7トレンチ

第6トレンチの西側に設けたトレンチである。第6図のセクション図からも判るように深さ1mまでの間に、砂質土と粘質土が実に複雑な重なりをみせているのである。このうち、東壁と南壁のセクションの上部の積み土は土塁のためと思われる。

すなわち、このトレンチの東側に南より北へ伸び、北壁付近で終る土塁を想定しよう。土塁の基底面は東壁の第6図⑬であろうか。この薄い層は焼土層であり、上面にカーボンがみられ、硬くしまってガリガリの状態である。この面の時期に火災に遭ったことが推察されるが、さらにレベル的に下位に当たる図中⑥の薄い層も鉄分が多く、硬くしまっており一時期の生活面と考えられる。しかし、もっとも確実な生活面は現地表下1mの図中⑨の上面である。この⑨は灰白色粘質土によって整地したものであり、トレンチのほとんど全面に広がっている。

これら3つの硬い面が存するトレンチ下部からは、染付、越前、須恵質陶片など城郭最終期より古い遺物が出土している。特に染付皿（第7図1）や越前播鉢（第7図8-10）などは15世紀末から16世紀頃の年代を考えてよからう。

また、トレンチ西北隅に試掘坑を設けて、さらに下方の状態を観察したところ、下方にも2つの面やピットが認められ、鉄滓や轆の羽口が出土し、鍛冶遺構の存在を示唆している。

出土遺物

今回の調査においては染付、青磁、白磁、瀬戸、美濃系、越前系、珠洲系、須恵質陶器、かわらけなどのほか、鉄製品、轆羽口が出土した。

船載陶磁器

（染 付）

第7図1は、いわゆる蕃笥底の皿の底部片である。素地は白褐色を呈す。底部内は左回転ロクロによって削り込んでいる。身込に暗青色のコバルト青料で文様を描き、内外に横線を引いている。その上に透明釉を施しているが、底部には釉をかけていない。釉は酸化気味のため幾分濁味を帯び、貫入が多い。割れ口の一部に接着剤と思われる黒色物が付着している。底部は使用により磨滅している。第7トレンチ出土。

〈青磁〉

青磁は4片得られたが図示したのは2点である。第7図2は皿の底部であろう。素地は灰白色を呈し、わずかに黒色粒子を含む。高台畳付部及び高台内や見込中央部は露出している。露胎部は橙褐色を呈す。釉の色調は黄ばんだ緑色である。第6トレンチ出土。

第7図3は碗の口縁部である。素地は灰白色の精土であり、淡緑色の釉は幾分濁っている。外面は二次的な火熱に遭っており、そのために外面に彫文があるらしいが明らかでない。第7トレンチ出土。

他の2片は細片であるが、1つは素地が灰白色の精土で外面に蓮弁文と思われるヘラ彫文がみられる。釉は淡青色を呈し、13世紀～14世紀の蓮弁文碗に似通っている（第7トレンチ出土）。もう一つは素地が灰色の精土であり、釉は暗緑色を呈す。やはり外面にヘラ彫文があり前者と同様の蓮弁文碗の可能性が強いが小片のため即断は避けた（第6トレンチの図⑨の層出土）。

〈白磁〉

白磁は前回調査において白磁小皿の底部（図版10の4）が出土しているが、今回は釉に幾分青味のある皿の底部が出土している（第7図4）。高台畳付及び底部内にはほとんど施釉しておらず、日本出土の明代の一般的な白磁皿とは異質であり、産地・年代についてはなお検討を要する（第7トレンチ出土）。

〈黒褐釉陶〉

第6トレンチより細片が1点出土している。素地は暗灰色の精度であり、堅く焼きしめられている。内外に黒褐色の釉がかかっている。壺の胴部片であろう。

国産陶器

〈瀬戸〉

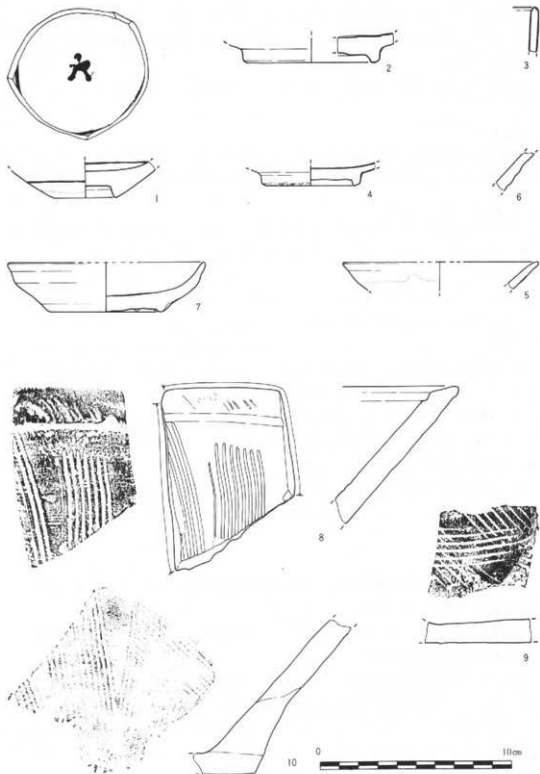
緑釉小皿と鉢の細片が得られた。

第7図5は緑釉小皿の口縁部である。素地は灰色を呈し、口縁部のみ施釉、釉色は淡緑色。外面露胎部は橙褐色を呈す。第6トレンチ出土。

第7図6は鉢の胴部である。素地は淡褐色を呈し、釉色は淡黄緑色で細かい貫入が走る。第4トレンチ出土。

〈美濃系〉

第7図7は灰釉小皿である。素地は淡褐色を呈す。全面に施釉され、身込や高台脇に釉が



第7图 船載陶磁器、瀬戸・美濃・越前陶片

厚く溜っている。釉色はおおむね淡緑色を呈し貫入が多い。高台内には重ね焼き時の白褐色の荒い耐火土による輪下チの跡が残っている。貼り付けた小さな高台の畳付は使用により磨滅している。第6トレンチ出土。

このほか、同様の灰釉小皿の細片が第1トレンチより2点出土している。

(越前系)

越前系陶片は壺・甕類の細片が4点と、搦鉢片が4点得られた。壺・甕類は細片のため図化しなかったが、3片が第7トレンチ、二次的研磨痕のある1片が第6トレンチより出土したものである。

第7図8は搦鉢の口縁部である。素地は淡褐色を呈し、器面の色調は橙褐色であるが、割れ口の2つの面や口端から外面にかけて二次的な研磨に用いられたため平滑に露出している。内面は8本一束の条線帯が下から上へと引かれているが、搦鉢としての使用により磨滅している。焼入はややあまく軽く焼き上げている。第7トレンチ出土。

なお、この破片や前述の壺・甕類の破片、そして後述する須恵質陶片などは破損後も何らかの研磨に再利用されていることが判るが、こうした例は鎌倉の中世遺跡や東京・葛西城址、千葉県の大街道町池ノ尻館址、神縄の中世遺跡など多くの中世遺跡出土の、特に拓器質陶片にみることができる。しかし、この研磨の対象が何であるかは未だ明らかではない。

第7図9は搦鉢の底部である。素地は茶色の部分がしま状に入るが、おおむね淡褐色を呈す。平らかな底面は粗面であり、内底には条線帯が引かれているが、使用により磨滅している。焼入はやはりあまい。第7トレンチ出土。

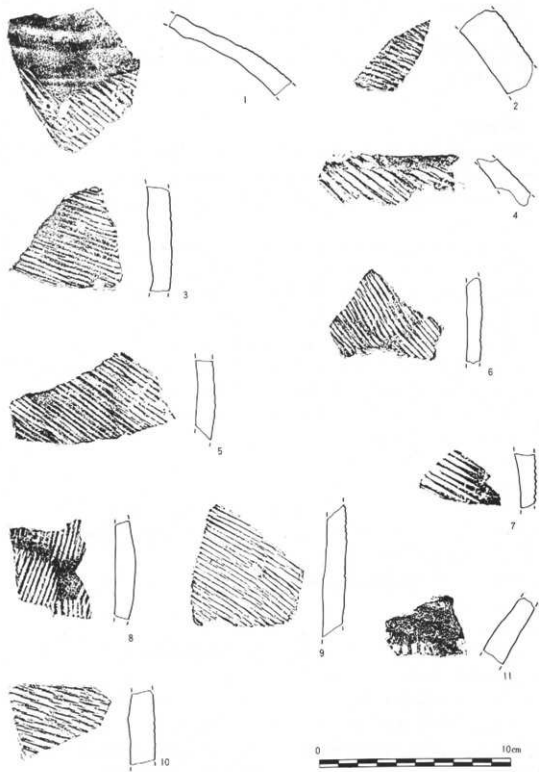
第7図10は搦鉢の胴部から底部の破片である。素地・色調は8・9とほとんど同じであるが幾分堅く焼きしまっている。内面及び底面は使用により磨滅している。第7トレンチ出土。

(珠洲系)

前回の調査において甕の破片が3点と搦鉢片1点得られたが、今回の調査では壺・甕・搦鉢の破片が11点出土している。

今回得られた破片のうち、第8図2は甕片であるが、第8図1、3～10は壺の破片である。第8図11は搦鉢の細片である。

素地はおおむね石英微粒などを多く含む灰色ないし暗灰色・青灰色を呈す。色調は青味のある灰色ないし暗灰色を呈す。外面には並行の条線を刻んだ叩き板の痕が残り、内面にはこの叩き締めの際の押え具の痕がみられ、部分的にはこの押え具の痕跡の上を撫で仕上げている。このうち第8図1の壺の肩部は内面に黒色物が付着している。割れ口にも付着しているため破損後の付着かも知れない。第3トレンチ出土。



第 8 图 珠洲系陶片

第8図4は第3トレンチ出土。5、9、10は第6トレンチ出土。3、6～8は第7トレンチ出土。

播鉢(第8図11)は回転台によって仕上げ内面に上から下方への条線帯を刻んでいる。第3トレンチ出土。

(須恵質陶器)

第9図1は壺の胴部と思われる。素地は紫褐色の精土であり、堅く焼きしまっている。外面は黒色を呈し、若干光沢がある。内面は暗褐色ないし暗灰色を呈す。成形時に叩き締めているが、外面の叩き板痕は縄目文のある並行条線であり、内面の押え具痕は青海波文である。第3トレンチ出土。

第9図2は、壺の肩部と思われる。素地は白色粒、黒色微粒を含み灰色を呈す。外面の色調は本来黒灰色のようだが、二次的に磨滅して灰色の素地がみえている。内面は灰色を呈す。成形は1と同様であるが、内面上部は横ナデにより仕上げている。この破片は第7図8と同様に破損後に何らかの研磨に使用され割れ口や外面が磨滅している。第7トレンチ出土。

第9図3は壺か瓶の破片と思われる。素地は外側表層が暗灰色を呈するほかは赤褐色である。外面は黒色を呈するが暗緑色の自然釉が胡麻ふり状にかかっており、器表の剝離が点々と見られる。内面は灰褐色を呈し、砂気が多くざらっとした感じである。外面の成形は平滑だが内面には叩き締めの際の押え具の痕らしきものが見られ、外面には縄目文の突帯が貼付されている。第4トレンチ出土。

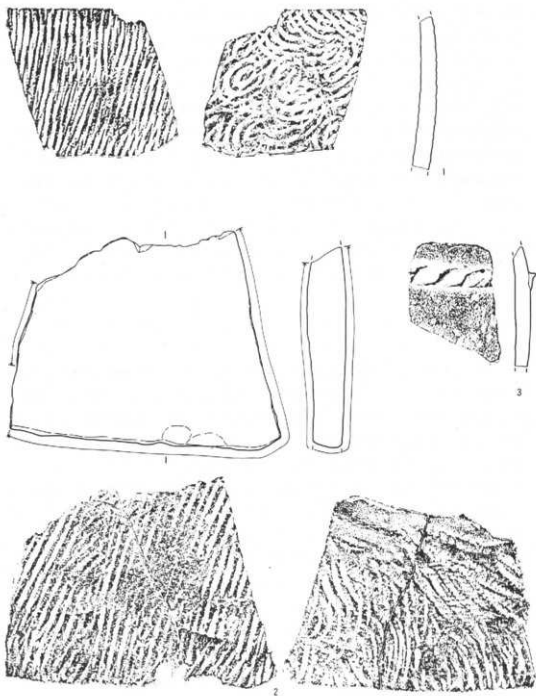
(その他の遺物)

やきものとしてはほかにかわらけと轆の羽口などがある。かわらけは細片であり、軟質で器表がとけているものが多いため、原形は明らかでない。轆の羽口は破片から推測すると、外径9cm、内径2.5cmの円筒状を呈す(第7トレンチ出土)。

金属製品には鉄釘と思われる小片が第6、第7トレンチから出土しており、第7トレンチからは鉄滓が得られた。

以上のように、本丸東及び南側濠の断面形態や東側の門付近の濠や橋台の原状が不十分ながらも知り得たのである。しかし、これら城郭最終期の遺構に伴うと考えられる文物はほとんど見られず、城郭の終末が戦火に遭うことなく平穏のうちに過ぎたことを示唆している。

これに対して本丸内の第6・第7トレンチにおいては最終期城郭の生活面より下方に火災などを物語る炭化物の多い生活面が発見され、そこから染付・青磁・白磁・黒褐軸陶などの船載陶磁器及び瀬戸・美濃系・越前系・珠洲系・須恵質などの国産陶器や、かわらけ、金属



第9圖 須惠賀陶片

製品、鑄羽口などが得られた。これらの遺構・遺物より大改築を施した最終期の城郭以前にもこの地に城郭が営まれ、その年代が出土陶磁器から15世紀ないし16世紀頃と推定できた。しかし、既述の如くこの生活面が上下の重なりをみせる4つ以上の整地面より成り立っていることは、室町後期という激しい戦乱の渦中にあったこの城郭のきびしい経緯を物語っているのかも知れない。そして、この下方にみられた室町後期の城郭時代の縄張りは、おそらく現地表に痕跡をとどめる最終期の城郭の縄張りとははなはだ異ったものであり、墨濠や曲輪なども比較的小規模なものであったに違いない。こうしてみると、本丸跡のうちにも古い濠や建築遺構などが発見される可能性が強いし、また、第7トレンチの北西隅に設けた試掘坑の調査によって、さらに古い遺構が埋藏されていることが知られた。ここから得られた青磁のなかに13世紀～14世紀頃のものと思われる細片が含まれていたことも、この城郭の築城が室町時代よりさかのぼり、当時の遺構面がなお地下に遺存されている可能性を強めている。いずれにせよ、本城址の歴史を知るうえで、将来の調査に期するところが大きいのである。

(大橋康二)

結 言

昭和53年、54年年度の発掘調査で7つのトレンチをあけたが、当城址整備復元のための多くの手掛りを得ることができた。当面復元の主たる対象となるのは、南側土塁及び濠、東側土塁及び濠、北側土塁であろうが、このうち、南側濠は北半分のみが略原形に復し得よう。何故ならば、その南半分は現道路下に広く入り込んで終っており、道路の改変以外には原形が出てこないからである。東側濠は、略旧時の状態を露出させることができると思われる。その場合には原形に忠実であることが特に望まれる。北側濠は現存せず、北側土塁に接して工場敷地がある。土塁をそのまま保存する以外に手はない。

問題は東側の橋の部分である。第1トレンチに見た如く、旧時の橋の下方はその南北の濠底より高い平担面をつくっており中・近世城郭の橋に通有な構造がここでもみられる様である。橋のやや南方で西方に入り込む濠の分岐部の保存状態(第4トレンチ)や第3トレンチの所見などからしても橋台部及びその周辺の地中での保存は悪くないと推測される。発掘が進めば橋とその周辺は旧時の景観に近いものとなろう。

本丸内の小試掘の結果は層位の面からしても遺物の様相からしても元和年中、堀丹後守直奇城主の時代より更にさかのぼる三つ以上の時期の遺構が重なって居ることをうかがわれた。いつかはトレンチの拡大によってこの辺の事情をよりはっきりと把握したいものである。しかし、若し復原のためのこれ以上の発掘調査を将来の問題とするならば、取りあえずは、濠をある程度埋立てるなどして遺跡を保護する様にしなければなるまい。その場合、特に注意すべきは排水の問題である。

(奥田直栄)

図版 1

第1 トレンチを東側より望む



図版 2

第1 トレンチ濠底の段



図版 3

第 1 トレンチ 滝底の段



図版 4

第 2 トレンチを東側より望む





図版5① 第2トレンチ濠内土層断面（北より）



図版5② 第2トレンチ濠東岸の土層断面（北より）



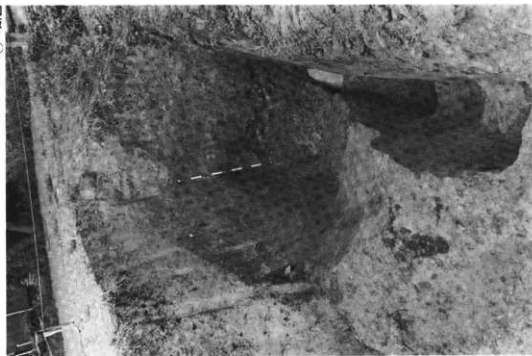
図版6 第2トレンチ濠内東部分の土層

図版 7
①



第3トレンチ(東より見る)

図版 7
②

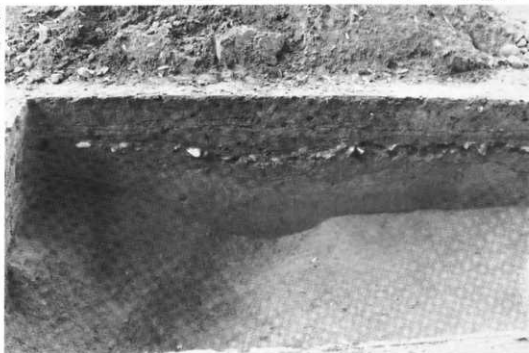


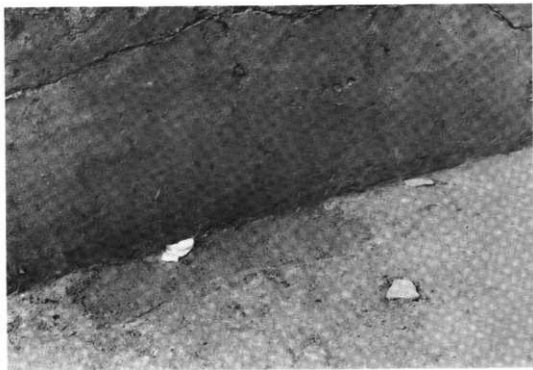
第4トレンチの溝(南より見る)

図版 8 ① 第5トレンチ (南より)

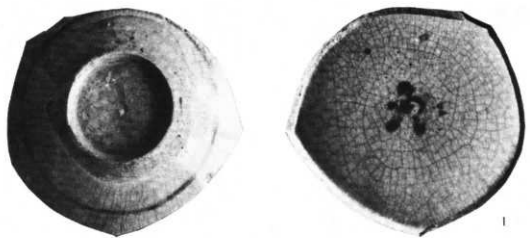


図版 8 ② 第6トレンチ (東より見る)

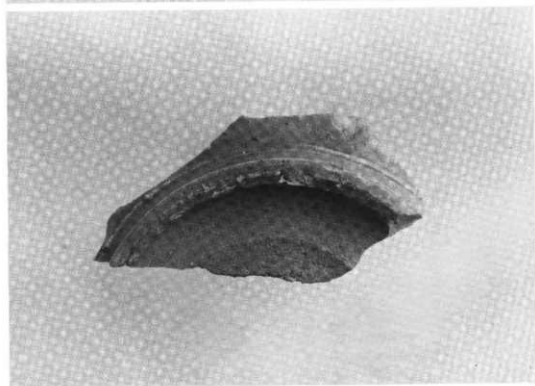
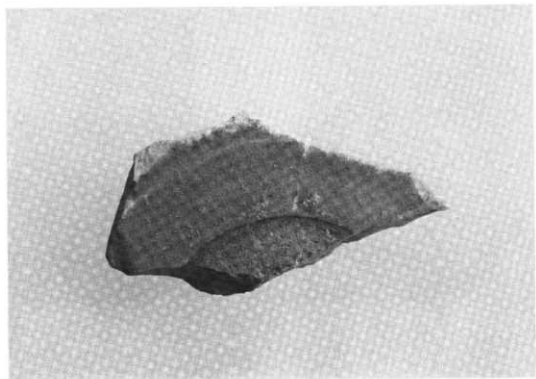




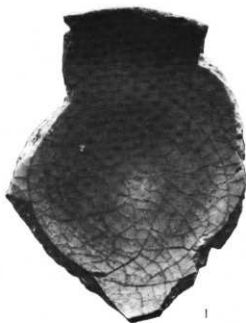
図版9 上 第6トレンチ美濃皿出土状態
下 第7トレンチ(西より見る)



図版10 染付・青磁・白磁
(4は第1次調査出土)



图版11 青磁

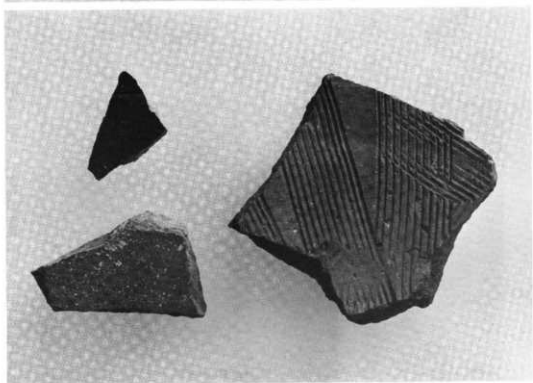
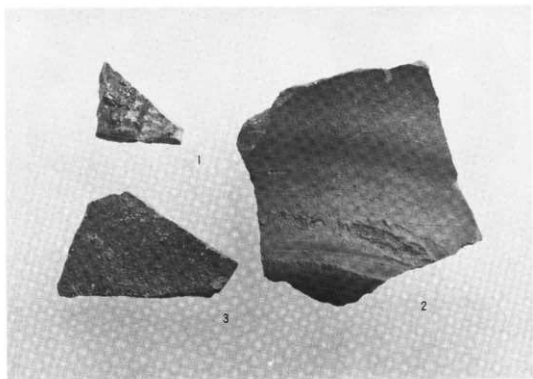


2

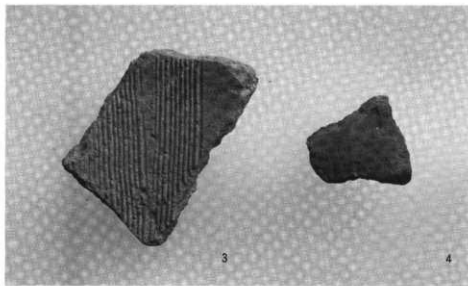


3

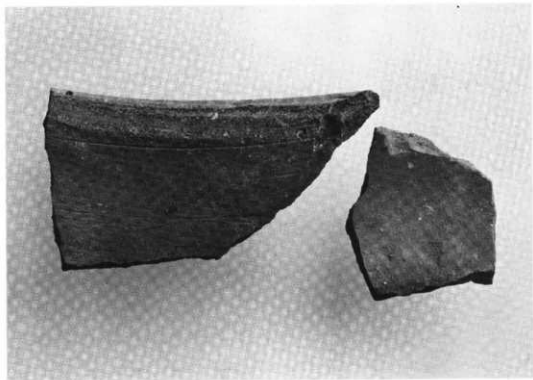
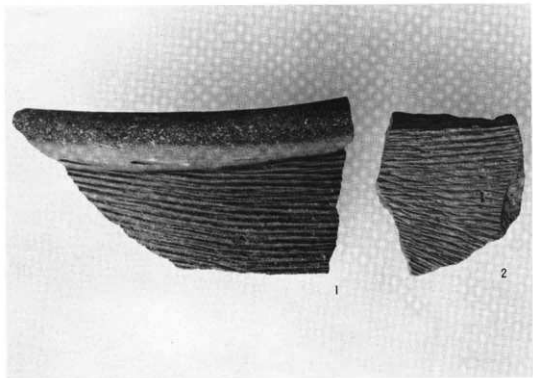
図版12 瀬戸・美濃



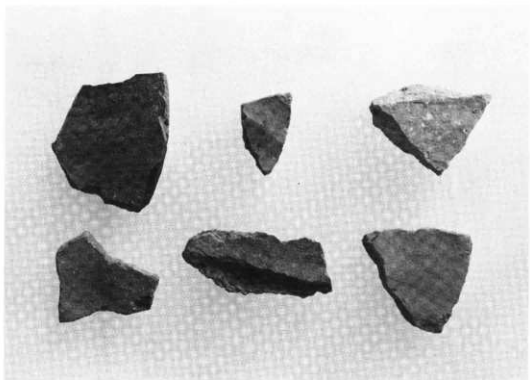
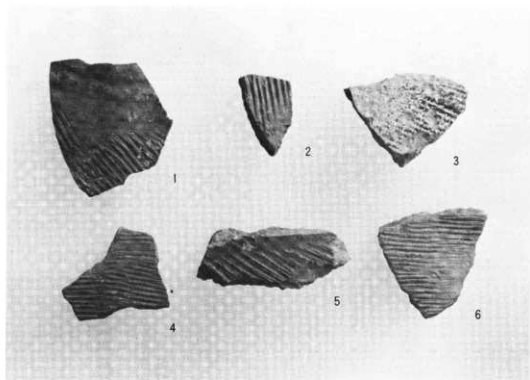
图版13 越前



図版14 越前・珠洲系
(3は第1次調査出土)



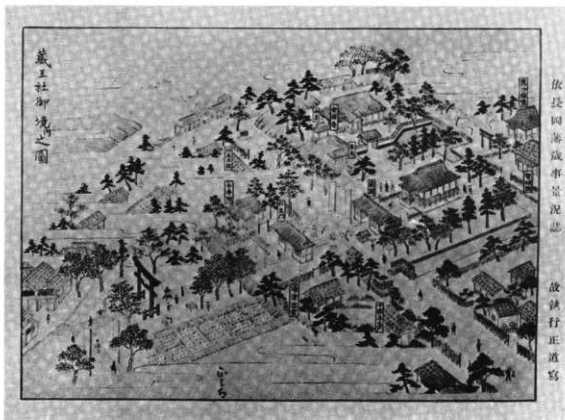
图版15 珠州系 (第1次調査出土)



图版16 珠洲系



图版17 須惠質陶器



圖版18 藏王社御境内之圖

星山貢「藏王大権現」昭和12年所収

藏王堂城址発掘調査報告書

昭和56年4月25日 印刷

昭和56年4月30日 発行

発行 長岡市教育委員会
印刷 あかつき印刷